

黒いはコーヒー、黒いは魔女。これは、コーヒーが「悪魔の飲みもの」とよばれていた時代の、どこかの国のおはなしです。

エルムフォード村に春がやつてきました。ニレの木々がならび、牧場で牛が草をはみ、小川の流れるゆたかな村です。村人はみな神さまの教えを守つて暮らしています。しかし、そんな平和な村にも、みなし子はいるものです。

エドガーはとほうに暮れていきました。森に取り残されてしまつたのです。

エルムフォードの孤児院で暮らすエドガーは、今年で十三になりました。教会のそばにたつ孤児院でくらしています。院の子どもたちの中でもひとりわ大きくて、ひとりわ知りたがりでした。だから、ほかの子どもたちを巻きこんで、森へ出かけました。かくれんぼしよう、と。

中にはセドリック先生のいいつけを守つて、反対する子もいました。もつともなことです。院長先生は、孤児院の決まりをやぶつた子に、おしおきを与えるのですから。礼拝堂のおそうじならまだいいほうで、ごはんが抜きになつたり、ぶたれたりすることもあります。でも、エドガーはたいくつでした。院では毎日、ご奉仕とお祈りばかり。ちつとも遊ばせてくれないのです。セドリック先生は村でただひとりの神父さまなので、村の有力者でした。どこにかくれて遊ぼうとしても見つかってしまいます。先生の目の届かない、村は

ずれの森で遊ぶしかなかつたのです。

さいしょは森の入口でみんなかくれていきました。けれどエドガーは毎回いちばんに見つかってしまうので、くやしくなつて、森いちばんの高い木にのぼつてかくれてやろうと思いました。草木をわけいり、いちばん高いニレの木を見つけ、枝までのぼると、日が落ちかけていました。

見はらしのいい木のうえからでも、ちつとも視界はひらけません。エドガーは人間です。フクロウのように夜目はきかないのです。風がぴゅうとふきぬけて、枝葉をゆらします。葉と葉がこすれて、ケラケラとエドガーをあざ笑いました。

エドガーは完全に日がしづむまえにどうにか木から下りると（実はこつそり孤児院からロープを持ち出していたのです。なんと手くせの悪い子でしょ）、暗い森を歩きはじめました。明かりはありません。道はけもの道ですらありません。ぬかるみや木の根っこに足をとられながら、あてもなく歩きました。

どのくらい歩いたでしょうか。エドガーはふたたび光に出会いました。ひとつはお月さまとお星さまの光で、もうひとつは、小屋の窓からもれるまばゆい光でした。昼間の太陽のように明るい光がもれています。あまりにまぶしくて、きずだらけになつた自分の青白い手足がはつきり見えるほどに。

ここなら一晩とめてくれるかもしない。

エドガーは戸をノックしました。返事はありません。もいちどノックしました。やはり返事がなかつたので、しびれを切らして、こつそり戸を開けることにしました。

森に住む狩人か木こりの小屋だと考えていましたが、それでもなかつたようです。オノも弓も矢もありません。暖炉では真っ黒な液体が大なべでぐつぐつにたつています。居間と台所はカウンターでへだてられており、カウンターの奥に、真っ黒なとんがりぼうしと真っ黒なローブに身をつつんだ女人の人がありました。カウンターには、びんがところせましとならんでいます。チョコレートのようなかぐわしい香りが小屋を満たすのでした。

女性が口を開きました。エドガーに内容は聞こえません。耳をふさいでいるからです。魔女のことばにたぶらかされてはいけない。セドリック先生の教えでした。

耳をふさいだまま、エドガーはあとずさりしました。すると女性はカウンターから出てきて、ひとしきりエドガーをなめまわすように見つめると、たなから一本びんを取つてきました。エドガーのそでをまくると、びんに入つた緑色の何かをうでにぬりはじめました。ひやっとした感触に、エドガーは思わず声をあげました。

「人のことばを聞かないからさ。けがしてるのかい、つて聞いたのに知らんぶりだ」

「魔女のことばなんか聞くもんか」

魔女は慣れた手つきでエドガーの傷口になにかをぬつていきます。そして包帯をまくと、おたまと器を持って暖炉のまえに行きました。

「森をさまよつたんだろう？　どうりで手足が冷えきつているんだ。森にふなれでかたくなな子どもか。なるほど、きみは孤児院から来たにちがいない」

おたまで大なべの液体のうわづみをすくつて器に移すと、器をカウンターへ並べました。飲んではいけない。

先生の顔がうかびましたが、エドガーの足はカウンターへ引きよせられていきます。器をとると、中にはあの真つ黒な液体が入っています。チョコレートのような香りと真つ白な湯気が、飲んでみろ、といぎないます。

使い魔になつてしまふ。

でも、こんないい香りのものが飲めるなら——それこそチョコレートが飲めるなら——使い魔になつていいと思えました。そつと器をかたむけて、おずおずと一口。チョコレートの味なんかしませんでした。濃くて苦苦て、エドガーは思いきり顔をしかめました。ところとした感触が舌をはうので、きもちが悪くてしかたありません。それでも、なんとか飲みこみました。

「ぼくを使い魔にする気だな？　こんな苦いものを飲ませて！」

魔女はくすくす笑つて いいました。

「そいつはコーヒーだよ。薬としても用いられた、ゆいしょただしい飲み物さ」
やはり魔女は魔女です。こんなふうに、人間をもてあそぶのですから！ エドガーはむきになつて言いかえしました。

「もう帰る」

「おかゆだけでも食べていいば？」

「帰る！」とむきになつてエドガーは戸を開けました。すると、魔女がエドガーの首に何かさげました。小枝をひもで結んだペンダントでした。

「これはお守り。この森で迷わなくなる。森の動物たちにはわたしから言つておくから、まつすぐ帰ること」

オオカミの一ぴきにも出くわさず、エドガーは森をぬけました（ふしぎなことに、フクロウのよう夜目がきくようになりました）。

孤児院についたころにはお月さまが高くのぼつていたので、セドリック先生にしこたま怒られました。あやうく二度と外に出られなくなるところでしたが、一ヶ月、早起きして礼拝堂のおそうじをすることと、森へたきぎを拾いにいくことを申しでると、先生は大目

にみてくれました。

ペンドントの力で、いまや森は孤児院のせまい庭も同然です。どの道がどこにつながつていて、どの木がどこに生えているのか、目をつぶつてもわかるようになつたのですから。おさんばがてら、森をうろついては枝を拾つてゆきます。あるていどまとまつたら、ロープでしばつて束にして、かついで孤児院へ持つてかえります。まだ春の冷えこみがつづくので、子どもたちも先生も大助かりでした。

しかし、ありがとうでお腹はふくれません。エドガーにとつても、たきぎ拾いはおいしい仕事でした——コーヒーとおかしをごちそうしてもらえるのですから。

ノックもせず、エドガーは小屋の戸を開けました。ずかずかと中へ入り、カウンターのまえを陣取ります。足元に枝の束をどんとおくと、おくれて小屋の主の声がしました。

「おやおや、今日もごくろうなことだね」

カウンターに器が差しだされます。エドガーはそれを両手で受けとると、ちびちび、液体を飲みました。

「どうせ使い魔になるんなら、もつと甘いものが飲みたかった」

「牛でもいれば、ミルクを入れられるのだけれど。へんぴなところにきたと思つて、がまんすることだね。だいたい、わたしは使い魔なんて持たないさ」

「うそだ。魔女はうそをつく」

「ほんとうのことだよ。だいたい、わたしだって、もとは人間だつたんだから」
氣をひくための作り話だろとエドガーは思いました。同情させて、今度こそ使い魔にする気なんだ。けれど、話を聞いてすぐに逃げれば、使い魔にされることもないだろう。話だけなら聞いてやつてもいいかもしない。

「じゃあ、名前は？　どこに住んでいたの？」

「タリア。エルムフォード村に住んでた」

そのことばがあまりに信じがたかったので、エドガーは残りのコーヒーをいつぺんに飲んで頭を落ちつかせると、タリアにたずねました。

「じゃあ、どうしてここに？」

「ヒントは、いまきみが飲んでいるそいつだ」

エドガーは器に目をやりました。飲みおえて底にしづんだコーヒーのこなが、まばらにちらばっています。

「黒といえ巴、なんだ？」

「夜、魔女、異教徒、カラス？」

「共通点は、みなおそろしくみえること。コーヒーは黒くてこげくさい。魔女の飲むふきつ

な飲みものにまちがわれるのも、むりはない」

たしかに、魔女の飲みものなのかもしれないと思いました。苦みがしつこくてまとつて、鼻と口のなかをこげくさでそめてしまうのに、ふしげとまた飲みたくないてしまふのですから。エドガーがここへ通つてコーヒーを飲みつづけるうちに、少しづつ口にふくむぶんには、苦さをあまり感じなくなつていきました。おそろしいことに、感覚がマヒしてしまつたのでしょうか。

「けど、コーヒーはさいしょから黒いわけじやない」

タリアは小なべに緑色の豆をばらまきました。エドガーを手まねきすると、暖炉のまえにやつてきました。木のへらでなかをかき混ぜながら暖炉の火に小なべをくべると、やがて、パチパチと音がしました。

「これはコーヒー豆。こいつをいると、だんだん黒くなつていくわけだ」

ぐるぐるかき混ぜること数分。豆が緑色からきつね色に、きつね色からこげ茶色にかわつてゆきます。そしてタリアは、いった豆をボウルへうつして冷まし、もみがらを手でより分けると、より分けた豆を白い乳鉢へいれました。白い乳棒で、豆をつぶしてゆきます。

「やつてみるかい？」

こくりとうなずき、エドガーは乳棒で豆を押しつぶそうとしましたが、うまく棒が豆に

あたりません。タリアとふたりでどうにかすりつぶしました。肩とうでに、ものすごい力がかかりました。

豆をひき終えると、タリアがなべに水をはつて待っていました。粉を水で煮たてて、おいしいコーヒーのできあがりです。液面に泡がぷっくりうかんでいます。エドガーがうわずみをすくつて一口飲むと、心なしか、いつもよりコクのある苦みを感じました。苦みがあとを引きますが、そのよいんすらおいしいのです。

「……おいしい」

ぼうっと、夢見ごこちでつぶやきました。魔女の魔法か、はたまた手作りの魔法にあてられたのでしょうか。そして、こんなにおいしいコーヒーなら、孤児院の子どもたちにも飲んでほしくなりました。あの、とエドガーは口を開きます。

「この粉、持つてかえつていい？　お礼になんでもするから、使い魔にもなるから」

孤児院は係の子どもたちにささえられています。礼拝堂のおそうじ係、せんたく係、食器をならべる係、食前の祈りをとなえる係、そしてごはんを作る係です。

エドガーはごはん係の子に当番をかわると申し出て、台所にむかいました。先生にはひとこともつたえていません。

なべ、ボウル、へら、水、六人分の器、タリアからもらったコーヒーの粉。じゅんびは万全です。お湯をわかし、コーヒーの粉を煮たてると、いいにおいが部屋じゅうを満たします。匂いにつられて子どもたちが集まつてきました。今までかいだことのない匂いに、みな、鼻をひくひくさせています。

「なにつくつてるの？」

席についた子どもたちがたずねました。上きげんに口ぶえをふきながら、エドガーは器にコーヒーをついでまわりました。

みんなで食前の祈りをとなえて、コーヒーをひとくち飲みました。あまい、おいしい、と子どもたちはくちぐちに言いました。エドガーはしたり顔です。

タリアのいれるコーヒーはたしかにおいしいのですが、なにも入れないので苦くてなりません。そこでエドガーは、みんなの器にひとさじずつ、おさとうを加えておいたのです。これで匂いはそのままに、苦みをやわらげることができました。おさとうはとつてもきょうです。かつてに使つてもなめても先生に怒られますが、かつてに当番を交代しただけでも怒られます。はなからどうでもよいのです。

「これ、なんていうの？ とつてもおいしい」

「コーヒー」

コーヒーは人をじょう舌にする力があります。みんな、仕事そっちのけでおしゃべりに興じました。とりわけ、村はずれの魔女のうわさで持ちきりでした。どうやら先生の頭痛の種らしく、このごろ先生はしょっちゅうどこかに呼びだされています。

ひとりがいました。

「そうだ。みんなで先生にコーヒーをごちそうしようよ」

「賛成。なあエドガー、この、コーヒー、だつけ？　どこで手にいれたんだ？」

五人の少年たちがエドガーを見ました。彼はことばをつまらせました。同じ年の幼なじみの目をまっすぐ見られない日がこようとは、つゆほども思つていませんでした。

しかし。にわかに子どもたちが三々五々ちらばつてゆきます。ピシッとした白い装束に、わきにかかえた聖典。

「コーヒー片手にうわさ話とは。まあ、まずは話をきいてやらんこともないが」

セドリック先生がおつとめから帰ってきたのでした。

セドリック先生の執務室は、かべが真っ白です。白は聖なる色。神につかえる者として、黒は断じてゆるせません。本だなにならぶ本の表紙も、黒いものは一つとしてありません。

ここは先生の仕事部屋で、お説教部屋でもありました。罪状はコーヒーを飲んだことです。

「黒はなんの色だ？」

「夜、魔女、異教徒、カラスの色です」

「よろしい。ごはん係を勝手に代わり、さとうをぬすんだのはおまえだな？」

「神さまにちかつて二度としません」

「よろしい。おまえがほかの子どもたちにふるまつていたものはなんだ？」

エドガーには答えられませんでした。

「ものを知らぬとは恐ろしいな。あれはコーヒー、悪魔の飲みものだ。あれを飲んだがさいご、いまやお前は悪魔の手先だ」

セドリック先生は聖典を開きました。

「あわれな子よ。いますぐに身を清め、悪魔を追いださねば」

すると、ろうろうと聖句を唱えだしました。

右手が、水の入った小びんに伸びました。ただの水ではありません——聖水です。びんのふたを開けると、エドガーに聖水をふりかけました。なおも祈りつづける先生に、たえきれなくなつて、エドガーはさけびました。

「魔女だ！ 魔女がぼくをたぶらかして、あれを飲ませたんです！ 森でまよつたあの日、あの黒い飲みものを飲まされて、使い魔になつて」

言いおえて、静けさの耳にささる心地がしました。

先生は祈りをやめて、きました。

「魔女？ だれだ？ どこに住んでいる？」

「村はずれの森の小屋に」

セドリック先生は執務用の机をはなれると、エドガーの頭をなでてやりました。かれのなかの悪魔は去つたようです。

「おまえは使い魔ではあるまい。惡しき魔女を、神の名のもとに告発してくれたのだから」先生にほめられたのはいつぶりでしようか。先生のてのひらの温かさが、エドガーのかぶつた心臓をしずめてゆきます。かたぶつの先生が顔をほころばせているのを見て、エドガーのきんちょうがとけてゆきました。

「おまえは今日のごはん係だろう。晩ごはんの支度をするがいい」

しかし手足のこわばりを感じたまま、エドガーは部屋をあとにしました。

夕食の席についていたエドガーは、ぼうつとしていました。時計がかねをうつ音、子どもた

ちのおしゃべり、スープのにおい、ようすがおかしいエドガーを正気にもどそうと、ぶえんりょに肩をたたく子ども。そうした一切を、頭が受けつけないのです。いまここにいるけどいない、どこかぼやつとひとごとな感覚が、エドガーを包んでいました。

エドガーツてば！ どなられ、肩をこづかれる三十九回目。ようやくエドガーはみんなのもとにもどってきました。見れば、自分のほかみんな手を合わせて、祈りをささげんとしています。あわててエドガーは目をつぶり、手を合わせ、先生と子どもたちとともに食前のお祈りをしました。

今日のごはんはおかゆとスープです。スープの器には、ついさっきまでコーヒーが注がれていました。

夕食も、やはり村はずれの魔女の話題で持ちきりでした。うわさ話にはたいてい尾ひれがつきます。人をみりようして自分の言いなりにしてしまうのではないか、この村にのろいをかけるつもりじやないか、人の血を飲むんじやないか——。おそれは好奇心とよく似ています。人間にとつて最高のスペースです。

エドガーはこんきよのないうわさ話を、一つずつ、心のなかで否定しました。

タリアはコーヒーを飲むし、村の出身だけど、村の人間をうらんでいるとは言つていな。なんて思うのは、やつぱりぼくが使い魔だからかもしれない。

そんなうわさ話に、先生が口をはさみました。

「私は、とうとう魔女の居場所をつきとめた」

「子どもたちの興味をひきつけるにはじゅうぶんすぎることばでした。みな、つばをのみます。」

「みなエドガーのおかげだ。彼はみずからたきぎ拾いを志願して森へ向かい、魔女のもとに通いつづけた。そして魔女の秘薬——コーヒーをぬすみだすことで、とうとう動かぬ証拠を手にいれた！ まちがいないな？」

先生と子どもたちに見つめられて、エドガーはうなずくしかありませんでした。先生はふところから一枚の紙きれを取りだしました。サインが入っています。

「このたび、正式に魔女討伐の許可がおりた。明日の朝、兵士たちを連れ森に向かい、魔女タリアをとらえにゆく」

場が、わあっとわきました。魔女を告発したヒーローが、ここにいるのですから。だれがはじめたものか、はく手がまきおこりました。

「明日にそなえて私はもう休む。おまえたち、夜ふかしをしないように」

そういって、セドリック先生は席を立ちました。しかし、もつと早く、エドガーはかけだしていました。おえつが、先生の声が、時計のかねの音が、遠く消えてゆきました。

風が森全体をゆさぶっています。にもかかわらず、息せききつて、エドガーはタリアの小屋にかけこんできました。中ではタリアが、のんびりと薬草を調合していました。

「息があがつて いるね。そんなに急いで、どうかしたのかい？」

「にげないと！　はやくここから」

「にげないよ。」

エドガーのことばを、タリアがぴしゃりと打ちとめました。

「わたしのことを、セドリック先生に話したんだろう？　わかるよ」

「どうして知ってるの？」

「魔女のカン？　魔法？　まあ、そんなことはどうでもいいさ」

「どうでもよくありません。明日の朝には、タリアはとらえられて火あぶりにされてしまします。すべてエドガーのせいです。なのに、彼も自分の運命ものろわないうタリアを見ていると、エドガーはなんだか腹がたつてきて、カウンターごしに立つタリアから乳鉢を取りあげました。

「なんでにげないんだよ、なんでぼくをせめないんだよ！」

「魔女の告発は村人のつとめじやないか。どうだい、わたしの居場所を売ったきもちは」

ようやくタリアと目が合いました。大きな黒目が、エドガーをとらえてはなしません。息がとまり、エドガーは空気をうばわれたこごちがしました。そうして、魔女を怒らせたことを理解したのでした。

「ごめんなさい。お願ひだから、にげてください」

「にげてもにげても追つてくる。そう遠くないうちに、にげた先もつきとめられる」

そう言つて、タリアはまた薬草を調合しはじめました。風はなおうなつています。

「だつたら、ぼくが立ちむかう。だから」

エドガーはタリアに作戦を話すと、あるお願ひをしました。

夜が明け、森の入口に、ぎょうぎょうしい一行がやつてきました。武装した何十人の兵士たちが、神父をまもるように行進しています。一行は示しあわせたように足をとめると、神父は年のわりに大柄な少年に話しかけました。少年の目の下にはクマがうかんでいます。

「魔女のものとへ案内しろ」

少年エドガーは一行を先導して小屋へ向かいました。

先頭の兵士二人が、らんぼうに戸を叩きました。中から黒いローブとぼうしの女性が出てくると、うむを言わせず、二人がかりで取りおさえてしました。

「魔女タリア。邪悪な魔術と飲みもので少年エドガーをたぶらかし、悪魔の手先にしたかで、きさまを火あぶりの刑に処する」

森じゅうに響きわたる声で、セドリック先生が言いました。しかし魔女タリアはすずしい顔をしています。たわごとでも聞かされているかのように。

「強情だな。やつざきがお望みか?」

「おことばですが、火あぶりが、それも孤児院のまえでの火あぶりがふさわしいかと」エドガーがとうとつに口をはさんだので、セドリック先生はいぶかって、いいました。

「火あぶりは教会のまえの広場で行うのが習わしだろう」

「この魔女はぼくを狙いました。つまり、まだほんの子どもを。一度と子どもが魔女におそれないよう、孤児院のまえで見せしめにするのです」

セドリック先生はその言葉にすっかり感心して、孤児院のまえでタリアを処刑することにしました。

タリアを兵士にこうそくさせたまま、一行は森を出ました。エドガーはとちゅう、うしろのタリアとこつそり目くばせをしましたが、さいわいにもそのようすがセドリック先生の目に入ることはありませんでした。

一行が村へ入ると、どこからともなく人だかりができました。村人たちがだんごになつ

て、道をふさいでしまうほどです。そして魔女を孤児院のまえまで送りとどけた頃には、村じゅうの人間が集まっていました。

「村人たちをまえに、セドリック先生はおごそかに告げました。

「これより、村はずれの魔女タリアの処刑をとりおこなう」

村人と、孤児院の五人の子どもたちが、手足をしばられ身体を刑具にくくりつけられたタリアをじいっと見ました。タリアの足元にはわらやたきぎが山になっています。「こやつは善良な少年エドガーを、魔術と悪魔の飲みものたるコーヒーでたぶらかし、悪魔の手先とした。神がおまえをゆるす日は来ないであろう！」

殺せ！ 殺せ！ にわかに大合唱がはじまりました。指揮者はセドリック先生です。彼が読み上げる罪状に合わせて、村人們は高らかにうたいました。

いよいよタリアの足元に火が放たされました。じきに魔女は焼きつくされるだろうとだれもが思ったそのとき、あつけなく火が消えてしまいました。水をうつたように場が静まりかえります——いえ、「よう」ではありません。魔女を断罪する炎が消えてしまい、みな冷や水を浴びせられたのですから。ただ二人をのぞいて。

セドリック先生は、魔女を助けた使い魔をどなりつけました。

「森に通いだしてから警戒はしていたが、もはや手おくれか、エドガー！」

孤児院の台所からしつけいした大なべを持ったエドガーが立っていました。処刑がはじまつて、みんなの注意がそれでいるすきに、台所に忍びこんでなべにたっぷりの水をはつてもどつてきたのです。

「コーヒーは悪魔の飲みものではありません。それどころか、神さまの教えにかなつた飲みものなのです」

エドガーはふとこころから小袋を取りだしました。なかには、ゆうべタリアに挽いてもらつたコーヒの粉が入つています。

「使い魔め！ こやつをひつとらえろ！」

二人の兵士がエドガーを取りおさえますが、エドガーはちつともひるみませんでした。「ミルクをもつてきてください。いまここで、コーヒーは悪魔の飲みものじやないことを証明しますから」

兵士の片割れは牛をかう村人にやむなく付きそつて、しづりたてのミルクを持つてこさせることにしました。そのあいだに、エドガーは子どもたちに頼んでなべに水をはらせます。ミルクを持つて村人が帰つてくると、エドガーはコーヒーの粉を水といつしょに煮たて、器にミルクを注ぎ、そのあとコーヒーを注ぎました。エルムフォード村のミルクは新鮮で真っ白。黒いコーヒーが、みるみる茶色に染まつてゆきます。

エドガーは器をセドリック先生に手わたしました。深く、コクのある香りのなかに、ミルクの香りがまざっています。意を決して一口飲みました。濃いコーヒーの味をミルクがまろやかに中和して、えもいわれぬ口当たりと風味をかもしだします。先生はすっかりほうけてしました。

これがエドガーの作戦でした。

タリアに頼んだお願ひとは、コーヒーの粉をエドガーにわたしてもらうことでした。そして先生を説得して、火あぶりの刑の場所を孤児院のまえにしてもらい、コーヒーをいるためのなべと水を確保します。すべて、目の前でミルクを入れたコーヒーをいれて、先生をなつとくさせるためでした。

「黒といえば、夜、魔女、異教徒、カラスの色。みな神をぼうとくしている！　しかし、白はどうでしょうか？　聖なる色、神さまの色だ！　真つ黒なコーヒーにミルクをくわえることで、清められて、神さまの教えにかなつた飲みものになるのです」

コーヒーが黒いのがいけないなら、黒くなくすればいい。黒くないコーヒーは、もはや悪魔の飲みものではない。訴えがくずされて、先生にことばはありませんでした。先生がちんもくしたことで、村人たちもわれに返り、一人また一人と、仕事に戻つてゆきます。村人たちが全員去ると、エドガーはタリアを自由にしてあげました。

「まさか、魔女を助ける人間がいるとはね」

当然だよ、ぼくはきみの使い魔なんだからね。

この話は遠く、教会のお偉方の耳にも届き、後日、コーヒーに洗礼がほどこされました。正式に、コーヒーはもう悪魔の飲みものではなくなったのです。タリアはふたたび人間とみとめられましたが、エルムフォード村にはもどりませんでした。森での暮らしが気にいつてしまつたようです。

エドガーは今でも、あの小屋に通つています。たきぎ拾いの合間に。そうして、毎回コーヒーをいれる練習をしては、タリアと楽しく語らうのでした。